

氏 名	栗 山 稔 くり やま のる
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 137 号
学位授与の日付	昭 和 54 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ワーズワス『序曲』の研究

論文調査委員 (主 査) 教授 御 興 員 三 教授 岡 照 雄 教授 本 城 格

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ウィリアム・ワーズワス（1770—1850）の自叙伝的長篇詩『序曲』（1805）が、ミルトンの代表作である『楽園喪失』『楽園回復』および『闘技者サムソン』の三作に共通する主題にたいして、基本的にいかに負うところが大きいかを論証したものである。ワーズワスは、この作品において、みずからの幼少年期をふりかえり、そのころしばしば体験した自己と自然との完全な融合をもって、自己が神と直接に出会った体験にほかならなかったと考え、そのころの自分自身を暗に楽園喪失以前のアダムとイーヴになぞらえる。しかし、その後青年期に達したワーズワスにはもはやそのような体験はありえず、その時期の自己は楽園を追われたのちのアダムとイーヴに比較される。やがてワーズワスはフランス革命に際会し、一時は、人間再生を眼のあたりに見るかのごとき感激を覚える。けれども、それは、楽園喪失の寂寥と、失われた楽園にたいする甘い追憶とが生んだ錯誤にほかならなかった。後年のワーズワスは、みずからそのような革命心酔の時期を、地上的な力による楽園回復を教唆した悪魔に惑わされて、神の存在を忘却した時期として回想する。このとき、詩人の脳裏には、すくなくとも『楽園回復』と『闘技者サムソン』とがあったに違いない。それらは、それぞれ、ローマの圧政から武力によってイスラエルを解放することを一時は夢見たキリストの迷いと、おのれの金剛力のみでイスラエル救済が可能であるかのように考えたサムソンの過ちとを描いたものだからである。

地上的な力に頼って楽園回復を図る空しさに気づいたワーズワスに、上述の幼少年期の純粋な体験の記憶がつぎつぎに蘇る。それらの体験そのものをふたたび体験するすべはないけれども、それらの記憶がいまも蘇ってくるという事実から、詩人は深い意味を読み取る。すくなくともそれは神につながる道がまだ完全に閉ざされていないことを意味するものであり、このような神とのつながりを常に強く自覚しつつ生きることこそ、心のなかに真の楽園を回復するゆえんであるとワーズワスは悟る。このような境地に達した自己を描くとき、ワーズワスは、ミルトンの三つの作品の主人公たち——楽園は失ったけれども内なる楽園を回復する希望を胸に秘めたアダムとイーヴ、荒野における悪魔の世俗的な誘惑を斥けたキリスト、そして、おのれの力にたいする過信から最後の瞬間に目覚めたサムソン——に、ひそかに自己を重ね合わ

せて見ていたに違いない。

以上が本論文の骨子であるが、以下、章を追ってそれぞれの内容を略述すれば、「第1章ミルトンに学びて」は序論的な性格を持ち、『序曲』第1巻の導入部に見えるいくつかの章句がミルトンの『楽園喪失』等の章句を踏まえたものであることを明らかにして、それは、ワーズワスが『序曲』全篇を通じていわばミルトンの目で自己を見詰めようとしていることを読者に予告するものであると論ずる。

「第2章英雄的行為」および「第3章抗命と服従」は、フランス革命直後に執筆された試作『ソールズベリー平原詩群』『廃屋』ならびに『行商人』等の各種草稿を比較検討することを通じて、ワーズワスが一時は戦闘的共和主義に傾倒し、政治的、社会的な一大変革を夢見たが、やがてその夢も醒めて、むしろ精神的な改革を重視するにいたる過程を詳細に跡づける。

「第4章自然の教育」は『序曲』第1巻の主要部と第2巻とを扱い、幼少年期のワーズワスがいかにしばしば自己と自然との純一な融合感を味わい、静穏で充実した喜びに浸ったかを、いくつかの重要なエピソードについて明らかにする。

「第5章『序曲』の成長」においては、ワーズワスが、当初は、第1巻の主要部と第2巻とをもってそれだけで一応完結した作品たらしめようと考えていた形跡があるが、その後構想を拡大して、青年期のさまざまな経験にも言及し、それらに即して楽園の喪失とその回復の望みとを仔細に語るにいたった経緯を、主としてワーズワス兄妹の書簡によって確める。

「第6章自然の息子」においては『序曲』第3巻を取り上げ、「自然の息子」であったワーズワスがケンブリッジ大学に入り、新たな環境にたいして強い違和感を抱くようになる経過を解明する。

「第7章楽園喪失」は、大学入学最初の休暇に帰省したワーズワスが、ひさしぶりに見る郷里の山河にどのような態度で接したかを語る『序曲』第4巻を対象として、詩人自身はふたたび故郷の自然に囲まれて深い満足を得たと言っているにもかかわらず、実は、幼少年期におけるような「一つの生命」との純粋な融合体験があったとは思われないことを詳細に論証する。

「第8章楽園への憧憬」は、『序曲』第5巻でワーズワスが当時流行していた人工的な教育理論にたいし激しい批判を加えているのを取り上げて、その批判の背後には、失われたみずからの楽園にたいする憧憬と、幼時の楽園体験の記憶が成人にとっても重要な意味を持つはずであるという信念とが潜んでいると指摘する。

「第9章黙示録的自然」は、ワーズワスが1790年夏に試みたアルプス旅行を回想する『序曲』第6巻が、アルプスの自然のありのままの描写というよりは、むしろ、フランス革命に感激した当時のワーズワスがアルプスの自然のなかに黙示録的な様相を読み込んだものであり、アルプス山中の原初的な人間生活のなかに見た信じた人間再生のヴィジョンの物語であることを強調する。

「第10章墮落世界」は『序曲』第7巻が、従来、18世紀末のロンドンの万華鏡的な観光案内に過ぎないというような批判があるのにたいして、この巻と、それに続く第8巻とを、幼少年期のいわば天使的な生活様態から、青年期の人間的な生活様態への避くべからざる移行を描いたものとして肯定的に理解した上で、ワーズワスはロンドンの現実を彼がそのなかで生きなければならない世界として受容し、現実世界とそこに生きる人間の実態をできるだけ正確に把握しようとしているのであると論ずる。

「第11章神の王国」は、ワーズワスが1791年から92年にかけてフランスに滞在した経験を語る『序曲』第9巻および第10巻を扱い、当時ワーズワスには、反革命の勢力をセイタンをはじめとする墮天使の群れと結びつけ、革命の勢力を神、キリストおよび天使と結びつけて、革命を地上に神の国を実現せんとする神聖な企てと考える傾向があったと指摘する。ただし、『序曲』執筆当時はすでに革命を神意の実現とは考えなくなっていたワーズワスは、革命当初は恒間見たと信じた地上の神の王国を、中世ロマンス風の夢幻的な世界にかこつけて描出することにより、それが結局は美しい幻想に過ぎなかったことを暗示しているとする。

「第12章ソールズベリー平原の幻想」と「第13章スノウドン山上のヴィジョン」は、すでに第2章と第3章とで扱ったワーズワスの試作時代を、詩人自身は『序曲』のなかでどのように位置づけているかを、第11巻ないし第13巻のそれぞれ中心的な部分について検討する。なかでも、第13巻の圧巻をなす、スノウドン山上で月光の下に見たヴィジョンを語る部分はもっとも重要であり、一面の霧の海を上下に貫いて一筋の細い裂け目が走り、その裂け目を通じて下界の無数の水音が天空高くまで昇ってくるさまに接したワーズワスは、そこに神の霊の創造行為と人間精神の想像活動とを同時に見たかのように、強い感銘を受けたという。『序曲』が、ワーズワス個人の経験に照らして人間精神の成長を考える物語であり、神的な精神が万物の内奥と万人の胸裡に存在することを自覚することこそ、真の人間救済につながる道であると説く物語であるとすれば、スノウドン山上のこの壮大で深遠なヴィジョンこそは、『序曲』全篇を締め括るにもっともふさわしいエピソードであると結論する。

論文審査の結果の要旨

本論文はウィリアム・ワーズワスの十数巻約九千行から成る自叙伝的無韻詩『序曲』の構成と思想とに関する研究である。ワーズワスはこの長篇詩を、1805年ころ、すなわち詩人が35歳に達したところに一応脱稿したが、以後終世断続的に推敲の筆を執り、ついに生前公刊するには至らなかった。したがってある意味では未完成の作品であり、詩人が意図した最終的な形については知ることができないが、さいわい多数の草稿が残されていることによって、われわれは仔細にその生成発展の跡をたどることができる。本論文は上に述べた1805年ころの段階における『序曲』を対象とし、その成り立ちを追うことを通じて青壮年期のワーズワスの思想を明らかにせんとしたものである。

本論文の筆者が、『序曲』は、はじめ1798年ないし99年ころ、約一千行の作品として一応の完成を見ていたと考えるのは、おそらく当たっている。それはおおむね後の『序曲』の第1巻と第2巻とに相当し、もっぱら幼少年期における詩人と自然との完全な融合体験のかずかずをうたったものであり、いわば詩人としてのワーズワスの生誕の歌であった。しかし、やがて青年期を迎えたワーズワスは、そのような体験に恵まれることが稀となり、自己の詩の源泉が涸渇するのではないかという強い不安にさいなまれる。その不安から脱出し、幼少年期の体験が、取り戻すすべもない体験でありながら、今もなお記憶に蘇るという事実そのもののなかに重要な意味を認めるようになるについては、ワーズワスは、本論文の筆者によれば、ミルトンの『楽園喪失』『楽園回復』および『闘技者サムソン』の教訓に負うところが大きいという。注目に価する見解である。

たしかに、ワーズワスには、幼少年期における自己と自然との融合体験を、アダムとイーヴの楽園体験に重ね合わせて見ようとするところがある。とすれば、一步進んで、本論文の筆者のように、ワーズワスが、アダムとイーヴが楽園を追われたにもかかわらず失われた楽園よりも「はるかに仕合わせな楽園」を心のなかに回復せんとする強い決意に生きたと語る『楽園喪失』に導かれて、みずからもまた失われた幼少年期の体験を新たな文脈のなかで回復しようと決意するに至った、というふうに考えることは決して無理ではない。ワーズワスは『序曲』第3巻以降で青年期に筆を進め、ケンブリッジ大学入学当初の大きな知的興奮と、その後間もなく陥った深い虚脱感、大学卒業後、華やかなロンドンの生活風景に接して感じた魅惑と嫌悪、フランス革命にたいする安易な期待と苦い幻滅などについて語るのであるが、一見混沌として無益に思われるこれらの経験も、本論文の筆者が説くように、ワーズワスはひそかにそれらを『楽園回復』においてキリストが受けた誘惑や、『闘技者サムソン』においてサムソンが嘗めた試煉になぞらえているものと解すれば、それらはミルトン的なパースペクティブのなかに収められることとなり、克服する者が克服することを通じて一層の高みに達するていの経験として新たな意味を獲得する。このように、ミルトンの三つの作品の主題をもって『序曲』全篇を支える骨格と見做すのは、本論文の筆者のきわめて独創的な着想であり、高く評価されなければならない。

ただ、難を言えば、ミルトンをもってワーズワスを律するに急なあまり、ワーズワスのワーズワスたるゆえんにたいする顧慮にやや欠ける憾みがある。とくに、『序曲』最終巻でうたわれているスノウドン山上で詩人が見たヴィジョンの解釈は、倫理的あるいは宗教的な解釈に傾き過ぎるように思われる。1805年当時におけるワーズワスの最大の関心事は、この最終巻の表題が「想像力」となっていることから明らかなように、失われた過去の楽園的な体験が、現実世界の混迷を潜って、今も記憶に蘇るという事実が、詩人としての自己にとって何を意味するかという、むしろ審美的な問題であったはずである。とすれば、月光のもとに拡がる厚い霧の海のなかの一筋の細い空隙をつたって、はるか下界の無数の水音が天空高く昇って行く光景のなかに詩人が見たと信じたものは、他のどんなものであるよりも先に、低きものを高きものに、在ったものを在るべきものに結びつける力としての詩的想像力の姿であったに違いない。むしろ、本論文の筆者も決してそのことを無視しているわけではない。ミルトン的な主題に即して論を立てる必要上、ワーズワスの審美的な面の考察がやや不十分となったのは、あるいは止むを得ないことであったとも言えよう。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。